

市町村名で思いつくこと

川崎市 相川義夫（本町五丁目）

最近、行政改革の一環として市町村合併が多く見られるし、これからも益々多くなると思われるが、その善し悪しは別にして、合併後の市長村名を決めるに ついてあまりに無神経というか、感性の貧困さ、低級さに憤りを感じる。勿論、我がふる里「上越」（本当は使いたくない）についても然りである。たかが名前と言 うなかれ。確かに名というものはそのもの に付けられた称号であり、単なる記号 であるに過ぎないかもしれない。併し人間が豊かな感性と情愛を持ち合わせた高等動物である限り、名というものに対する愛着の重さは非常に大きいのである。それは歴史や文化という長い間の堆積が心にならず高く積み、決してそこから逃 れられないからである。考えて見て貰いたい。例えば、飯に鎌倉、軽井沢、箱根、日光等の名前が消滅したら地域の人、い

や全国民はどう思うだろうか。

新しい市町村名を決める際にいつも問題になるのは、合併する市町村が互いに自分の名を相手の名に変えることに強い拒否反応を示すことであろう。その結果差し障りのない極めて陳腐な名前に落ち着くことが多いようである。併し行政当局・関係者に言いたい。何れかの従来の名前を使うにせよ、新しい名前を付けるにせよ、無味乾燥な名だけは避けて貰いたい。

翻って我がふる里を考えても、高田・直江津の名が消えて、「上越市」、これはあまりにも情感に乏しい。高田・直江津以外にするにしてももっと個性的なアー ト感溢れる名がないものか。再度、市町村合併があるならばぜひ考えて欲しいものである。ついでに更に提案したい。その際、呉服町、桶屋町、職人町等、昔の

町名を復活したらどうだろうか。東京の人形街、馬喰町、八丁堀等、たまたなく魅了されるからである。これが実現したら、住民もきつと喜ぶと思うし、新たな市の発展のきっかけになるのではない。郷土出身者としてもまことに愉快な気分になる。これらは無理な願いというものだろうか。

